

史料室を担当するに際して

山 内 祥 史

渡辺久雄顧問が、高齢の故をもって史料室責任者の職を辞したい意向であること、その後任として私に史料室を担当して欲しいと思っていることなどを、山口光朔院長代行から聞いたのは、たしか一九八九年二月下旬のことであった。ちょうど、大野篤一郎教授から、自分は来年度から総合文化学科の学科長に就任することになったので、これまでに勤めてきた「学報」編集委員会委員長の職を辞したい、ついでにはその後任を引き受けてくれないかと依頼されて、承諾した直後のことであつた。どうやら、私が学生部長の職を勤め終わって、三月末に解放されることになったので、狙われた形跡がある。その前には、大野教授から、大学院日本文化学専攻の責任者の役も依頼され、その後には、松本政彦大学事務長から、家庭会会計幹事の役を依頼されたのであつた。山口院長代行には、「学報」編集委員会の方を依頼され、引き受けてしまっているのに、勘弁して欲しいといった。だが、山口院長代行は、史料室と「学報」とは深い関わりがある、兼任可能であろう、ぜひ一考して欲しいといわれた。そのうち、一考してみると、宮仕えの身、これまでの関わりからいっても引き受けざるをえないかと思うようになってきて、三週間ほどのち、山口院長代行に、なんとか頑張ってみることにしますと、返答したのであつた。



学院の史料整備の仕事は、一九七〇年から始められ、それが発展して史料室が設置されたのは、一九七二年のことである。責任者は、日本史専攻の和島芳男元教授、西洋史専攻の鈴木恒彌元教授から歴史地理学専攻の渡辺久雄元教授へと継襲されてきた。私がこの史料室と関わりをもつようになったのは、何時からであったか判然としない。『神戸女学院百年史 総説』（一九七六年十月十二日発行）と『神戸女学院百年史 各論』（一九八一年三月十二日発行）との二冊の学院史のうち、「各論」の方は、初め辻橋三郎元教授が纏め役を引き受けておられたようだが、途中で辞退された。直後、その役が私のところに廻ってきたのである。むろん、不向きだと自覚していたので、固辞したのだが、ついに説伏されてしまった。史料室と私との関わりは、その時からできたように記憶する。『神戸女学院百年史 各論』は、私の自覚が的中し、二、三年も遅延したが、それでもなんとか刊行には漕ぎ着けることができた。この『神戸女学院百年史 各論』出版後間もなくの一九八一年七月に、史料室運営委員会が発足し、その時私も委員を委嘱された。山口院長代行から、史料室の担当を依頼されて、想い起こしてみると、八年ほどの間に運営委員で残っているのは澤 千芙美教諭と若山晴子助手と私との三人だけになってしまっているのだ。そのうち、『神戸女学院百年史』の時から、史料室と関わりをもっているのは、若山晴子助手と私との二人だけになってしまっているのであった。

右のような経緯から、私は、一九八九年四月一日、史料室長に就任することになった。同時に、つぎの方々が、旧来の慣習によって、院長代行から任期二年で、史料室運営委員を依嘱された。まず、委員は、中高部の金子敏男教諭と澤 千芙美教諭、大学の茂 洋教授と本城智子教授、図書館の小暮（刀禰）康事務長、史料室の若山晴子助手。また、

任意出席委員は、山口光朔院長代行、小玉佐智子学長、津田庄八郎中高部長であった。

却説、神戸女学院史料室には、まだ運営に関する規程がなかった。渡辺久雄顧問は、規程案を作成され、委員会で検討も始められていた。それで、新委員会では、これを継承し、まず懸案の運営規程案を検討することから始めた。一九八九年六月二十三日、先の委員の方々に集まっていたき、すでに大綱ができあがっていたその規程案を、できるだけ生かすようにして、「神戸女学院史料室規程(案)」をまとめた。さらに、同年七月三日開催の部長会で、その案を審議してもらった結果、同日付で正式に「神戸女学院史料室規程」が決定し実施されることになった。新しい規程では、史料室専門委員会と史料室運営委員会との二種の委員会が置かれることになって、夏休み明けの九月には、全委員が決定した。

専門委員会は、院長代行から委嘱された、チャブレン室の茂 洋教授、図書館の奥 祥子課長補佐、中高部教員の金子敏男教諭、大学教員の本城智子教授、史料室長が推薦し運営委員会が必要と認めた澤 千芙美教諭に、史料室の若山晴子助手、石村真紀職員を加えた計七名によって構成されることになった。また、運営委員会は、山口光朔院長代行、茂 洋チャブレン、小玉佐智子学長、津田庄八郎中高部長、小暮(刀禰)康図書館事務長、今村一之総務部長、有光 通経理部長に先の専門委員全員を加えて構成されることになった。運営委員会において史料室の「運営に関する基本的事項」の審議がなされ、その決定に則した形で、専門委員会において「史料室の業務、事業の円滑な遂行を計る」という、組織になったわけである。ともに、史料室長が委員長となり、原則として、運営委員会は年一回、専門委員会は年三回、招集されることとなった。

「史料室規程」によれば、「史料室は、次の業務及び事業を行う」ことになっている。(1)学院に関する文書諸史料の収集、整理、保管。(2)学院史全般に関する情報の提供。(3)機関誌「学院史料」その他学院史に関する印刷物

の刊行。(4)その他学院の歴史に対する関心を高めるための事業。

このうち、もっとも重要なのは、(1)であろう。とくに、いま「収集」しておかなければ、あとでは「収集」不能な「文書諸史料」の「収集、整理、保管」こそ、たいせつだと思う。微力ながら、のちの学院史執筆者たちが、正しい判断のできる「史料」を遺すことに、意を傾注したいと念じている。各委員を初めとする学院関係者のご協力を、せつに願ってやまない。